

1. 悲劇とは何か？

■サウルの生涯は悲劇であったと言われます。悲劇とは、偶然起こった不幸や悲しみのことではありません。むしろ、当然起こるべくして起こった道徳的帰結のことです。サウルは何もこのような最後を迎える必要はありませんでした。人生の進路修正の機会は何度もありました。しかし彼は、破滅に向かいつつあることを知りながら、自分の道を変えようとしなかったのです。そこに彼の生涯の悲劇があります。

豪華客船タイタニック号の沈没事故についても同じことが言えます。いくつかの要因が、その事故を悲劇的なものにしました。タイタニック号は、1912年4月、サウサンプトンを出て、ニューヨークに向かいました。処女航海でした。構造上、不沈船と呼ばれ、安全度、速力、その豪華さにおいて世界最高の客船でした。しかし、出発して数日後、静かな晴れた夜、氷山に衝突して沈没しました。1,500名の人命が失われ、歴史上最大の海難事故となったのです。なぜ、そうなったのでしょうか。

4つの理由があげられます。

1. 安全を過信し、救命ボートを十分準備していなかった。
2. 世界最速船であることを証明するために、最短航路を選び、氷山のある地域をあえて避けようとしなかった。
3. 高収益をもたらす、乗客のニューヨーク向けの電報が優先され、氷山発見の電報への対応が遅れた。
4. SOSの信号は、近くを航海していたいくつかの船によって受信されたが、それが不沈船タイタニック号からのものとは即座に信じられず、救助が遅れた。

2. サウルの生涯の教訓

■これらはすべて科学への過信と、経済的収益の優先がもたらしたものです。事故は決して偶然ではありませんでした。そこにタイタニックの悲劇があるのです。しかし悲劇は常に教訓を残します。だれでも、ある法則を破れば、必ずその結果を刈り取ることになるだろうという教訓です。では、サウルの生涯が残した教訓とは何でしょうか。何が彼を悲劇の生涯へと導いたのでしょうか。その決定的要因は何であったのか。それ

は預言者サムエルとの訣別です。聖書は言っています。「サムエルは、死ぬ日まで、二度とサウルを見ることはなかった」サウルはサムエルと訣別して、錨を失った船のように大海をさまようことになりました。

私たちの場合も、自分の人生行路の安全確保のために、決して訣別してはならないものがあるのではないのでしょうか。サウルにとって預言者サムエルであったものとは、私たちにとっては何でしょう。それは「聖霊の声」です。私たちの内側から聞こえてくる細い声です。聖書は言っています。

「今日、御声を聞いたら、心をかたくなにはならない」と。

さらに私たちが捨ててはならないのは、どんな人の心にも必ず存在する「善なるものへの憧憬」です。人の注意や警告に耳を傾けようとする、素直で正直で、謙遜な心です。これを捨てるとき、私たちは必ず信仰の破船に遭うのです。

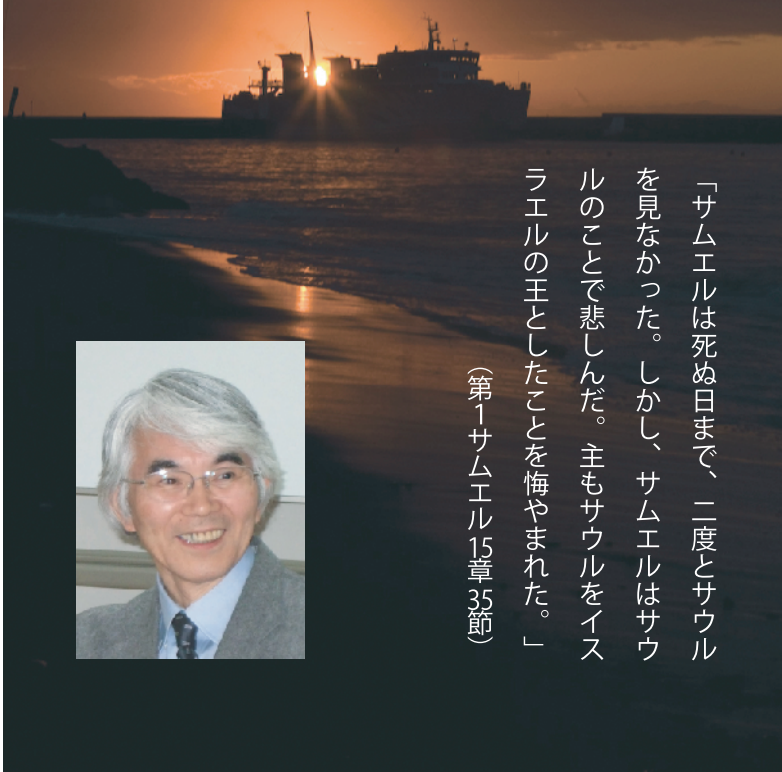
最後の晩餐のとき、イエス様は、厳しい言葉を弟子たちの前で発せられました。「あなたがたのうちひとりが、わたしを裏切ります。」この言葉は、弟子たちに大きな衝撃を与えました。彼らはみな自分の心を探りました。そんな思いが自分のうちにあるとすれば、なんと恐ろしく、また悲しいことだろう。弟子たちはそう思っかわるがわるイエスに問うたのです。「主よ。まさか私のことではないでしょうか」と。しかし、ユダにはその態度がありませんでした。彼は開き直りました。彼の決意は固かったのです。サウルもまた、預言者との訣別が、彼の後の生涯に、どれほど重大な意味を持つかについて十分な洞察が欠けていたのではないのでしょうか。

サウルの悲劇

ゲストスピーカー特別講義

大津キリスト教会牧師
・学院顧問

米村 英二師



「サムエルは死ぬ日まで、二度とサウルを見なかった。しかし、サムエルはサウルのことで悲しんだ。主もサウルをイスラエルの王としたことを悔やまれた。」
(第1サムエル15章35節)

3. 実現されなかった願い

■その後、サウルは、悪の力に翻弄されながら、もがき、苦しみつつ、人生の最期へと向かいます。こうしてサウルの生涯は失敗に終わるのです。しかし失敗したからと言って、彼の人生のすべてが否定されるべきではないように私には思われます。どんな人の人生も、ただ外側に現われた行為だけで、そのすべてを評価するのは必ずしも公平とは言えないからです。

サウルは、確かに悪の力に負けました。しかし決して抵抗しなかったわけではありません。彼なりに悪と戦い、そのために真剣に祈ったことがあったに違いありません。

イギリスの詩人ブラウニングは言いました。「われらが善について欲し、望み、夢見しすべてはあり続ける」と。

私たちの現実、ただ欲し、望み、夢見るだけで終わってしまうことのほうが多いものです。しかし、実現はできなくても、私たちが欲し、望み、夢見たことはみな、神にささげられた音楽として天に昇り、神に聞かれています。だから、ただ願っただけでも意味はある。望み、夢見ることに価値はある。これがブラウニングの信仰でした。預言者サムエルは、サウルをあきらめるのが早過ぎたのかもしれませんが。サウルにも、サムエルの知らない、真実な心の生活があったとどうして言えないでしょうか。行為として外に現われることはなかったけれど、本当はこうありたいとサウルが心の中で願ったことは、決してむだではなかった。それらはみな神に覚えられている。神は、それらの思いを同情の目をもって見てくださっていた、と想像するのは間違いでしょうか。

明治期に札幌農学校の校長として来日し、「少年よ大志を抱け」という言葉を残したクラークは有名です。けれども帰国後の、彼の後半生は、必ずしも幸福とは言えませんでした。クラークは日本から帰ると、一つの夢を描きました。それは水上大学をつくることです。大きな船に大学の設備を備え、教授も学生も乗り、船の中で講義が行なわれ、学生たちは世界を回りながら三年で卒業するという壮大な計画でした。そのためには膨大な資金がいります。その資金を得ようとして彼は鉱山業に手を出し、それが失敗し、ついに破産してしまうのです。こうして失意の中で人生の最後を迎えたクラークは、その死の床でこう言いました。「私は自分の生涯の事業で、ひとつとして足るべきものはありません。ただ日本の札幌においての八ヶ月間、学生たちと起居をともにし、彼らに聖書を教えたことだけが、いま私の生涯を閉じるにあたって、自分の心を慰めるに足る唯一の事業です。私が死んだら、そのことを彼らに伝えてもらいたい」

クラークは、自分の夢の実現のために、結果的には破産し、不本意な人生を送ってしまいました。では彼の人生は失敗だったのでしょうか。確かに鉱山事業は失敗でした。しかし彼の描いた教育への壮大な夢は、たとえ実現されなかったとしても、札幌で学生たちに聖書を教えたことに劣らず、価値ある事業ではなかったのでしょうか。同様に、サウルにも、まじめな戦いがあったと思います。挫折し、敗れはしましたが、彼の戦ったその戦いがむなしく葬り去られることはないのです。それを暗示する聖書の箇所がいくつかあります。第一は、ギレアデの人たちが、サウルの親切を忘れず、彼の亡骸を手厚く葬ったことです。第二は、信仰と勇気の人であったサウルの子ヨナタンが、最後まで、父サウルに対する尊敬を失わなかったことです。第三は、サウルに命を狙われ、長い逃亡生活を余儀なくされたダビデさえも、サウルの死を悲しみ、「イスラエルの娘らよ。サウルのために泣け。サウルは紅の薄絹をおまへたちにまとわせ、おまへたちの装いに金の飾りをつけてくれたではないか」と、心からの追悼の歌を歌ったことです。

聖書が残したこれらの記述は、サウルと同様、過ちの多い人生を送っている私たちにとって、大きな慰めとならないでしょうか。